

第 23 話 諸国官軍の衰勢

けれども、諸国の官軍は既に全く疲弊しつくしていた。 終に後村上天皇が崩じて、九州の官軍も衰え、近畿の官軍もまた衰える。

新田義興の惨死

これより先き、天皇が天野の行宮に遷らせられた頃から、朝廷のご威勢が次第に衰えたことは既に述べたが、その後の東国の官軍はどうかというと、先年、笛吹 峠と鎌倉とに敗れた新田義興、義宗、義治の 3 人は、この 3~4 年の間、越後国（新潟県）に城郭を構え、国を半分位も打従えて、やや勢力を盛り返していた。この時、正平 13 年 4 月、尊氏が死んだのを機会に、武蔵（埼玉県、東京都）、上野（群馬県）辺に潜んでいた身方の者共から、どなたか 1 人を大将として義兵を挙げたいから、東国へ出て来てくれるようにと行って来た。

新田義興はこれに応じて、潜かに武蔵野国に入って兵を起こそうとしたが、忽ち鎌倉の管領足利基氏の執事の畠山国清に嗅付けられて、その卑怯な計略にかかり、彼の家来の竹沢良衡らのために、正平 13 年 10 月 10 日、武蔵の矢口の渡しで自殺しなければならなくされた。

新田氏一族の忠誠

東国の官軍は、それきり全く振るわなくなりましたが、しかし、新田氏の一族はその後も永く朝廷のために忠義を尽した。義宗は正平 23 年 7 月、義治と共に上杉憲将らの鎌倉勢と戦って戦死したが、義治はその 2 年後に、再び兵を起こして上杉氏と戦い、更に義宗の子らに至っては、その後 7~80 年後まで、苟くも機会ある毎に起って南朝のために尽した。実に南朝の武将らは、この新田氏といい、楠木氏といい、菊池氏、北畠氏、名和氏といい、どこまでも正統の朝廷をお護りして、一家一族悉く斃れて後に已むの誠を尽したのです。

これを足利方の武将らが、常に目の前の利益のために動いて、兄弟で争い、父子で戦い、主従、朋友の間でも、まるで猫の目のように、敵ともなり身方ともなって恥ぢなかつたのに比べると、実に雲と泥との違いです。

さて一方、京都では、足利義詮が父尊氏の後を継いで將軍となると、南朝のご威勢の衰えに乗じて、その行宮を犯す計画を立てて、鎌倉の基氏にも兵を募らしたので、彼はその命令に従い、正平 14 年 10 月、畠山国清に関東の兵を率いて京都に上らせた。義詮は自ら攻撃軍の総大將となつてその 12 月に河内に向つて、出発した。

天野の行宮はこれを聞かれて大いに驚き、後村上天皇は難を避けて南河内の檜尾山観心寺に遷られた。

義詮が河内の行宮を犯す

戦いはその 25 日に、先づ四條畷で始まったが、もとより官軍は兵が少ない上に、名将も乏しかつ

第23話 諸国官軍の衰勢

たので、次第に諸城をおとし陥れられて、翌15年の3月にははたけやまくにきよ畠山国清の軍にこんごうじ金剛寺を焼かれ、続いて紀伊（和歌山県）の官軍もことごと悉く攻め落とされて、閏4月には僅かにお楠木正儀の赤坂城が持ちこたえているだけになった。その赤坂城も翌5月には遂についで陥れられ、まさり正儀は金剛山に退いたが、賊軍も、もはやこれ以上には攻撃せずとも良いと思ったのだろう、それきり、かんしんじ観心寺の行宮をも犯さず、よしあきら義詮は諸将と共に、5月28日に、京都に凱旋した。

しかし、足利の諸将の内訌は、この時もまた起こっていたのです。彼らは京都に帰ると、直ぐにまた角突合を始めて、幕府の執事のしつじ細川清氏、鎌倉管領の執事のかんれい畠山国清らは、共に謀って、その頃にも勢力のあったにつきよしなが仁木義長を討とうとしたので、よしなが義長は遁れて、伊勢（三重県）に走り、正平15年7月、遂に南朝に降った。

官軍、また義詮を走らす

この内訌は、南朝方がないこう乗じるのに好い機会を与えた。くすのき楠木正儀は忽ちまさり金剛山を出て河内の諸城を攻落としました。こうして官軍の勢いが大いに振ると、正平15年9月、ごむらかみ後村上天皇は進んで摂津の住吉に遷られて、住吉神社のしかんつもりくにかず祠官津守国量の邸を行宮と定められた。そして翌16年11月には、賊将のほそかわ細川清氏もまた南朝に降ったので、12月に、官軍は大挙して京都に進み、よしあきら義詮らを近江に走らせて京都を回復したが、こんど今度もまた、いつもと同じように、間もなく賊軍のために奪還された。

こういう風に、朝廷では賊将らが降参して来るのを利用して、そのごいせい威勢を盛んにしたのですが、正平19年に、久しく山陰に在って、官軍のために尽していたやまなときうち山名時氏が叛いて北朝に降り、続いて、きよしなが仁木義長、いしどうよりふさ石塔頼房、きらみつさだ吉良満貞らも皆北朝に降ってからは、官軍の勢いはいよいよ衰えた。

後村上天皇の崩御

けれども、賊将らの内輪喧嘩はその後も決して絶えず、互いにせいりよく勢力の争いを事としていたので、ごむらかみ後村上天皇は京都に近い住吉の行宮で、なおげんぜん厳然としてごいせい威勢を保たれていたのですが、正平23年3月11日、遂にその行宮でお崩れになったのです。ご在位は30年で、御年は41才であらせられた。

天皇はごようしょう幼少の時から軍事に御身を委ねられ、遠く奥州の地にもたびたび赴かれたが、吉野で御位に即かれてからは、専ら御父ごいし後醍醐天皇の御意思を大切に、王政回復に御心おもむを注がれた。そのためには、しばしば危難をも冒せられたのみならず、その皇居をも、丹生川の奥のきなん賀名生の山中に定められ、或いは河内のあ金剛寺、かわち観心寺へと遷られて、あらゆる不自由をも忍ばれたのでした。正平七年におとこやま男山まで御進発になった時には、今度こそ先帝のご意思をも達せられるかに思われたが、それも空しくみつ水の泡と消えて、ついに一度も京都の土をお踏みにならずにお崩れになったのです。

天皇にはごきょうだい兄弟が多くありましたが、御兄のたかなが尊良、もりなが護良、つねなが恒良、なりなが成良の諸親王は、疾うに逆賊と尊氏兄弟の為に、いづれも悲しむべき最後をお遂げになり、今、御兄のむねなが宗良親王は信濃におられ、御弟のかねなが懐良親王は九州におられるのですが、いづれもごようしょう幼少の時に別れになったきりで、再びお会いになることも出来なかったのです。いかにさびお淋しく思われたことでしょう。天皇の御遺骸は河内のいがい観心寺にかわち葬り、

第 23 話 諸国官軍の衰勢

次に第 1 の皇子寛成親王がお立ちになった。これを第 98 代長慶天皇と申し上げます。

懐良親王のご落胆

遙かに九州に在って、東上の第 2 段の計画を立てていた懐良親王がこれを聞いて非常に落胆されたのは、言うまでもないでしょう。三十年前に、御父天皇がお崩れになって以来、御兄天皇とのご再会を唯一のお楽しみとしておられたのに、もはや永久にその機会がなくなったのです。折角、無理な思いをして東上しても、喜んで頂こうと思った御兄天皇はおられないのです。長い間のご苦心を物語るにも、今度の事を御相談なさろうにも、誰と云って、お胸に浮んで来るお方もなくなってしまったのです。親王のご失望はいかに深く、いかに大きかった事でしょう！ 長い間の張り詰めたお心も弛んで、今まで一筋に思い込んでおられた東上のご計画に対しても、恐らくは次第に熱を失われたことだろうと想像されます。

足利義詮の遺託

一方、京都では、その頃細川頼之が幼少の義満を輔けて、幕府の政治を執っていました。これには一つの逸話も伝えられています。

細川頼之

正平 22 年 12 月、義詮が病に罹って臨終が近づいた時に、彼はその時僅かに 10 歳の子の義満と重臣の頼之とを枕頭に呼んで、両方の手に 2 人の手を執り、先づ義満に向って、「義満、お前に 1 人の父を授ける。わしが亡くなった後は、細川殿を父として、よく其のお指図に従えよ」といい、次に頼之に向って、「細川氏、御身に 1 人の子を授ける。わしが亡くなった後は、義満を子として、万事の面倒を見て下され」といって息を引き取ったというのです。

頼之は足利氏の一族ですが、その歴代の中でも第一の人物といわれるくらいで、軍功があったばかりでなく、政治の才にも長けていた。殊に慎み深い人でしたから、義満の近侍を戒めて奢りをとどめ、又、わがままな諸将をもよく抑えたりして、内は幕府の悪い政治を改めると共に、外は今川貞世を特に九州探題に任じて九州の官軍に当たらせた。この頃から足利氏の基礎は漸く固くなったのは、全く頼之の功といっても良いのです。

九州探題今川貞世

さて、今川貞世は長慶天皇の文中元年の正月に始めて筑前（福岡県北部）に入った。探題に任ぜられてから 2 年の後でした。彼は文武の両道に達し、又、智謀にも富んでいたもので、これまでの探題らがやったような失敗を再びしないためにと、慎重に準備を重ねました。かくしてその年の 8 月になって、彼は大宰府の官軍に総攻撃を加えた。懐良親王を始め菊池武光らは力を極めてこれを防いだけれども、賊軍には周防（山口県東南部）の大内弘世を始め、少弐、大友、阿蘇の諸族が一斉に参加したので、遂に 3 日間の激戦の後に、その 12 日になって陥れられて、正平 16 年の 8 月以来、12 年

第23話 諸国官軍の衰勢

間も官軍の本拠としていた大宰府は今川貞世らの手に帰した。

菊池武光の卒去

武光は親王を奉じて筑後（福岡県南部）に退き、高良山に本陣を置いた。官軍の勢いはここでも大いに振るったので、しばしば賊軍の陣をも襲い、大宰府の回復を図っていたが、何という不孝であったか、官軍の柱石である武光が病に罹って、文中2年11月に死んだのです。子の武政が後を継いで、暫くはなおよくその勢いを保っていたが、彼もまた翌3年の5月に死んだ。

武政の子の武朝はその時12才の少年でしたし、賊将今川貞世の軍はますます勢いが盛んで、間もなく筑後川を渡って攻め寄せて来そうでもあるので、官軍は逆も支えることができなくなって、遂に高良山をも退いて肥後（熊本県）の菊池の本城に引き上げました。

菊池武朝

その後も菊池武朝はよく一族を率いて賊軍に対抗し、天授元年 -- 文中3年の翌年 -- の水島の戦いに、菊池城に迫って来た貞世の軍を大いに破り、あるいは天授4年の詫磨原の合戦に僅かな兵を以って良成親王と共に貞世の大軍を走らせたりしたが、しかし官軍の勢いは次第に衰え、その3年後の弘和元年6月23日には、遂に菊池の本城も陥りました。

懐良親王の薨去

のみならず弘和3年3月には、懐良親王も矢部の山中でお薨れになってしまったので、官軍は一層勢力を失った。

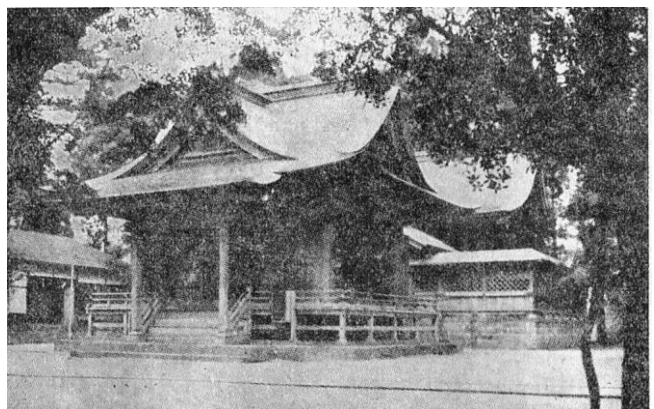
親王は先に東上の御望みも挫け、大宰府を退かなければならなくなった事などから、全くご落胆され、多年ご奮闘の疲れも覚えられて、この世を厭うお心をさえ起こされたが、天授元年の夏、水島の戦いの前に、良成親王に征西将軍の職をお譲りになって、懐良親王は筑後の矢部の山中に退隠され、只管お経などを読んで、日をお過ごしになっていたのです。お年は55才でした。

菊池武朝はその後も良成親王を奉じて官軍の回復を図ったが、次第に賊軍に追い詰められて、遂に元中8年の秋には最後の八代の城をも陥れられた。その時、良成親王は八代の奥に退隠されたが、その後、密かに遁れて矢部の山中に赴かれて、南北両朝合一の3年後、即ち後小松天皇の応永2年の秋に、その地にお薨れになった。

菊池武朝は応永14年の3月に、45才で死んだ。

菊池氏の功績

こうして九州の官軍も全く衰えてしまったが、菊池氏が武朝の曾祖父の武時の時から70余年の間、一家一族そろって朝廷に誠をつくした功は偉大といわなければなりません。楠木、新田、



熊本 菊池市

きくちじんじや
菊池神社

第23話 諸国官軍の衰勢

きたばたけ なら なが ちゅうしん あお ゆえん
北 畠の諸氏と並んで、永く 忠 臣の家と仰がれている所以です。

後、明治天皇は特にその勲功を追 賞 されて、武時に従一位を贈られ、武重、武光、武政、武朝ら
にいづれも従三位を贈られた。今、肥後の菊池郡隈府町に在る別格官幣社 菊池神社は、即ち武時以下
の諸将を祀った 社 です。

くすのきまさのり 楠木正儀

ところが、その頃近畿には一つの残念な事が起こった。それは楠木正儀が北朝に降った事です。
せいちゆうむ に まさしげ ちゆう こう ふた まつと まさつら ひさ
誠 忠 無二の正成を父として、忠 と功を二つながら 全 うした正行を兄とし、久しく官軍の中心となって
吉野の朝廷をお守りして来た正儀が、長 慶 天皇が御即位の翌年、即 ち正平 24 年正月、南朝に叛いて北
朝に降りました。これには何か深い仔細があつたらしいのですが、その事情は分かっていません。し
かし、心から足利氏に 従 ったのではない事は、その後、再 び南朝に帰 順 したのでも明らかです。

きん き かんぐん 近畿の官軍

ただ楠木正儀が北朝に降ったために、官軍の勢いはいよいよ衰えましたが、同時にまた、彼が北朝に
居た 間 は、賊軍が大挙して南朝を攻撃する事もなかったのですから、或いは自分の身を南北 両 朝 の間
に置いて、合戦をさせないようにと力めたのだったかもしれません。されば弘和 2 年正月、正儀が北朝
に降ってから 14 年目になって、山名氏清が賊軍を率いて官軍を攻めて来た時には、正儀は既に南朝に帰
順 していて、大いにこれを防いで 戦 ったのです。しかしこの戦いに、彼の軍は全く敗れて一族郎等の
多くは戦死して、正儀自身の行方も不明になりました。

こうして、近畿の官軍もこの時から 全 く 衰 えてしまったのであります。

(第23話 諸国官軍の衰勢 終わり。次は前頁に戻り、第24話 南北朝の合一 へ)